

## 主体的・対話的で深い学びを実現する授業構想例【国語／国語総合】①

### 1. 対象（実施を想定する学校・生徒の実態の概要）

普通科特進コースである。全員が4年制大学への進学を希望している。授業には前向きに臨み、反応も良い。与えられた課題をそつなくこなす一方で、自分の考えを整然と説明したり、人前で発表したりすることに抵抗を感じる生徒が多い。「C読むこと」の指導は、年度初めの随想教材で「文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読む。」（指導事項ア）を指導した。本単元では、指導事項ウを扱い、小説の読み方の基本をつかませた上で、登場人物の心情を考察させる。発想が柔軟で豊かな生徒を軸に、対話を通してすべての生徒に作品を深く読み味わう面白さを体感させたい。

### 2. 単元名

『羅生門』登場人物の心情を分析しよう。（全7時間）

教材：芥川龍之介『羅生門』（『高等学校 国語総合』明治書院）

### 3. 単元で育成すべき資質・能力の三つの柱につながる単元の評価規準

<b>①知識・技能</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○小説『羅生門』の構成を理解している。</li> <li>○『羅生門』に用いられている特有の語句について、その意味や用法を理解している。</li> </ul>
<b>②思考・判断・表現</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【読むこと】（文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう）</li> <li>○ミニホワイトボードのまとめや材料A～Cを活用しながら、個人やジグソー活動を通して課題に取り組み、下人や老婆の描写を踏まえてその心情を考察している。</li> </ul>
<b>③主体的に学習に取り組む態度</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○150字程度のまとめには、他者の考察を踏まえた思考の深まりや変容があり、自分の考えの深まりを可視化しようとしている。</li> <li>○振り返りには、下人や老婆の人物像やその後の展開への言及があり、課題に対する考えを踏まえて発展的に考察しようとしている。</li> </ul>

### 4. 本時の目標

（略）

### 5. 授業展開【 本時 ・ 単元 】

#### 解決したい課題や問い

作者によって描かれた真の悪人は誰か？

考えるための材料A	考えるための材料B	考えるための材料C
それぞれの視点から本文を読み解く。		
「暇を出された」下人や「せねば、飢え死にををする」老婆の生きた時代はどのようなものだったのだろうか？	下人が「老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」を持ったのはなぜか？	「悪人」を描くための作者の工夫にはどのようなものがあるか？
<b>想定される活動</b>	<b>想定される活動</b>	<b>想定される活動</b>
『羅生門』に描かれた時代的背景（人心の荒廃・治安の悪化・死者の増加）を把握する。 （これに係る古典教材（『方丈記』「養和の飢饉」など）を生徒自身が探せるとよい。）	「局所に逢着」しながらも積極的に悪を働く勇気が出ずにいる場面や、「悪に対する悪は許される」という老婆の論理を聞いて自身の論理にすり替える場面などから、その心理を考察する。	下人が悪を肯定するに至る過程や、正当性を主張する老婆などの描かれ方について、人物、情景、心情の効果的な描写を検証する。
それぞれをエキスパート資料とし、ジグソー活動によって統合し、課題に取り組む。		

## 対話と思考（対話を通じた協働的な問題解決のプロセス）

【エキスパート活動】材料ごとに3人グループを作り、それぞれの視点から課題に取り組む。

[材料A]（活動を通して、災害が立て続けに起こった当時の京都では、生活の困窮により人心は荒廃しており、下人が暇を出されたのも、老婆の行為も、その余波によるものと結論づける。）

[材料B]（活動を通して、積極的に悪を働く勇気を持たずにいた下人だが、「悪に対する悪は許される」という老婆の論理を盾に取り、自己の行為（引剥）を正当化したと結論づける。）

[材料C]（活動を通して、状況に流されやすく身勝手な下人の描写や、不気味な容姿で自己の行為の正当性を冷然と主張する老婆の描写に、「悪人」を描くための工夫があることに気付く。）

【ジグソー活動】各エキスパート1人ずつからなる3人グループをつくり、課題に取り組む。

▶私は下人だと思う。元々生きるために悪の道に走るという選択肢を持っていたわけだけど、ただ勇気がなかっただけ。▶そうだね。身勝手な下人は、老婆の論理から勇気を得て、自己の行為を正当化した。▶「黒洞々たる夜」という表現は、悪人としての下人の暗い将来を暗示しているんだね。▶だけど、「盗人になる」という決断を下人にさせたのは結果的に老婆だよ。だから、僕は老婆が真の悪人だと思うな。▶確かに、極限状態における心理は誰でも同じ。仮に下人じゃなかったとしても、老婆に出会うことで誰でも悪人になり得たということか。▶だとすると、下人も被害者の一人とすることができるね。

【クロストーク活動】

（各グループによる話合いの過程やまとめた見解を発表し合う。その後、改めて「解決したい課題や問い」について個人で考察し、自分の考えを150字程度にまとめる。）

## 学習の成果（予想される生徒のあらわれ）

〔150字程度にまとめた自分の考え〕

・「下人だと思う」

安易な正義感、にきびを気にしながら老婆の命乞いの言葉を聞く態度など、下人の自分勝手な言動が象徴される表現が多い。恐怖と好奇心→憎悪と怒り→満足感と優越感→失望と憎悪と変遷してきた下人の心理が、老婆の最後の発言により「勇気」に一気に動く展開により、悪を正当化する下人の姿が際立っている。（142字）

・「老婆だと思う」

最後の場面ではしごの口から門の下を覗く老婆の描写には、彼女の言葉をきっかけに悪に走った下人の暗い将来が暗示されている。老婆によって主張された「生きるための悪は許される」「悪を働いた人間に対する悪は許される」という、悪を正当化する論理は、死か悪かで葛藤していた下人の揺らぎを悪に傾かせてしまった。（147字）

・「誰でもない」

死を選ぶか、悪を働くかという極限の選択を強いられた状況で、悪人を定めるのは困難だ。生きる為のあらゆる行為を正義とすれば、たとえ死者を冒瀆する行為であってもそこに悪は発生しない。「悪とは？」の物差しが軸になり、災害や飢饉などに苦しむ人々の誰もが悪人になり得る。老婆はその点を主張し、下人は老婆の論理を借りた。（153字）